現代のオペラスターたち

文=中東生
Text=Shinobu Naka

オペラの楽しみはなんといっても歌手の至芸を楽しむこと。ここでは、現代のオペラスターを、ソプラノ、メゾ、テノール、バリトン&バスのそれぞれから3名ずつ紹介。ヴェテランの域に達した歌手が中心にはなるが、さまざまな舞台を経験してきた彼らの歌唱を聴けば、オペラ歌手のすごさをきっと体感できるはず。

このオペラ特集に際し、各声種3人ずつ「スター」を選ぶ作業は意外と難しかった。その定義は必ずしも「現在最高」と同義ではないが、人気と実力、キャリアを総括して、なるべく公平に選んでみた。

ソプラノ Soprano

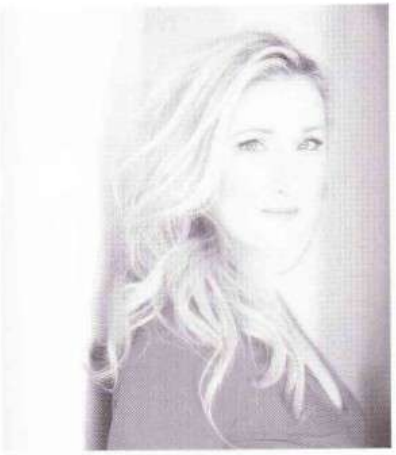
アンナ・ネトレプコ Anna Netrebko 進化するトップスター

1971年ロシア生まれ。1994年モーツァルト《フィガロの結婚》スザンナ役でマリンスキー劇場にデビュー。世界的ブレイクは2005年ザルツブルク音楽祭でのヴェルディ《椿姫》。軽いレパートリーを歌っても陰翳のある声で、「マリア・カラスの再来」とまで謳われた。色気を前面に出した容姿や演技も武器に、トップスターへと上り詰めた。出産を経て成熟した声や、前夫アーウィン・シュロットの「好みに合わせて」ふくよかになったため、重いレパートリーに移行し、2019年ミラノ・スカラ座のネッロ・サンティ指揮《椿姫》を最後に、ヴィオレッタ封印宣言。歌詞の不明瞭さが難点だったが、イタリアで勉強したユシフ・エイヴァゾフとの再婚後は、イタリア語の発音が改良されている。重過ぎるレパートリーに手を出しても、彼女なりの確固たる発声の基礎があり、声に支障をきたすことはない。現在の当たり役はマクベス夫人で怖さが小気味よい。今号が出るころには日本での夫婦共演を終えているはず。

アンナ・ネトレプコ（S）©Brescia e Amisano

ディアナ・ダムラウ Diana Damrau 見出された歌姫

1971年ドイツ生まれ。1995年モーツァルト《フィガロの結婚》のバルバリーナ役でヴュルツブルクのマインフランケン劇場にデビュー。国際的には、2004年スカラ座のリッカルド・ムーティ指揮、サリエリ《見出されたエウロパ》で、タイトル通り「見出された」感がある。ほかにもモーツァルト《魔笛》の夜の女王やR・シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》のツェルビネッタなどコロラトゥーラ役でキャリアを築き、軽々と動けて高音も安心できる割には肉感的な声が魅力。体当たりで現代的な女性を演じるので、ヴェルディ《椿姫》も含めた自立心の強い女性像が当たり役。エディタ・グルベローヴァ亡き後、ドニゼッティの「テューダー朝の3女王役」に欠かせない存在になるだろう。夫ニコラ・テステと5月に来日予定。


ディアナ・ダムラウ（S）©Rebecca Fay

ルネ・フレミング Renée Fleming しっとりした役柄が似合う

1959年アメリカ生まれ。1986年ザルツブルク州立劇場のモーツァルト《後宮からの逃走》コンスタンツェ役が初めての大役デビュー。その後メトロポリタン歌劇場の女王として君臨するも、応対はフレンドリーだ。声に無理をさせない、基礎を崩さない発声が安心感を与える。しっとりとした女性役なら何でもいけるが、ヴェルディ《椿姫》のヴィオレッタやモーツァルト《フィガロの結婚》のアルマヴィーヴァ伯爵夫人のほか、R・シュトラウス《アラベラ》やドヴォ

ルネ・フレミング（S）©Andrew Eccles-Decca

ルジャーク《ルサルカ》の題名役、チャイコフスキー《エフゲニー・オネーギン》のタチアーナもはまり役。

メゾソプラノ Mezzosoprano

エリーナ・ガランチャ Elīna Garanča

近年は情熱的な歌唱を聴かせる

1976年ラトヴィア生まれ。1999年マイニンゲン州立劇場からキャリアを始めた。アンナ・ネトレプコを売り出した面々が、ネトレプコの次に目をつけていたというだけあり、スター性がある。実際は気さくな人柄だが、冷静な歌唱で、R・シュトラウス《ばらの騎士》のオクタヴィアンのようなズボン役がはまっていた。その後ビゼー《カルメン》やサン＝サーンス《サムソンとデリラ》のデリラ役などの濃厚な女性像を経て、現在はマスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》のサントゥッツァが最高の当たり役と言える情熱的な歌唱に達している。

エリーナ・ガランチャ（Ms）©Paul Schirnhofer/DG

チェリーリア・バルトリ Cecilia Bartoli

歌劇場の監督としても活躍

1966年イタリア生まれ。両親とも歌手だということもあり、9歳のときにプッチーニ《トスカ》の羊飼いの少年役でデビュー。声量はないが、親直伝の完璧な発声で30年以上、メゾのトップグループで走り続けている。キャラが立ち過ぎて、何を歌っても「バルトリ」になってしまうが、ロッシーニ《セビリャの理髪師》のロジーナ役や同じくロッシーニ《チェネレントラ》のアンジェリーナ役などコケティッシュな役がいちばん映える。2012年からザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭の芸術監督として毎年一つのオペラ公演を作り上げ、主演しているが、今年からモンテカルロ歌劇場監督にも就任。

チェチーリア・バルトリ（Ms）© 2021 Cecilia Bartoli

ジョイス・ディドナート Joyce DiDonato

巧みなコントロールが武器

1969年アメリカ生まれ。サンタフェ・オペラでの下積みを経て、2000／2001シーズンにミラノ・スカラ座でロッシーニ《チェネレントラ》のアンジェリーナを歌ってから、メトロポリタン歌劇場のスター・メゾソプラノの座まで上り詰めた。絶対的な息のコントロールとアジリタが強み。ヴィブラートが目立ち過ぎるときもあるが、年々少なくなっている、マスネ《サンドリヨン》のリュセットのような可愛い役も、ベッリーニ《カプレッティ家とモンテッキ家》のロメオ役もリアルにこなせるのは、役に成り切るエネルギーが強いからと言える。ロッシーニ《セミラーミデ》では、題名役が憑依したかと思われるほど入れ込んで歌ったので、当たり役の筆頭に挙げたい。

ジョイス・ディドナート（Ms）© Chris Singer

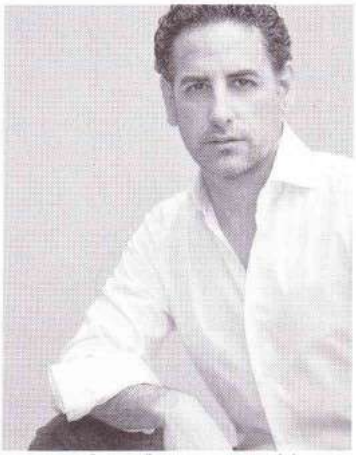
テノール Tenor

ヨナス・カウフマン Jonas Kaufmann

等身大の魅力を醸し出す

1968年ドイツ生まれ。1994年にザールラント州立劇場と専属契約を結ぶが、ブレイクは2001年にチューリヒ歌劇場に移ってから。ラテン的甘いマスクで女性ファンが多いが、実際に話すと至って自然体。それが演技にも表れているので、等身大の魅力を醸し出すのだろう。何を歌っても華があるが、意外にもヴェルディの喜劇《ファルスタッフ》

ヨナス・カウフマン（T）
© Gregor Hohenberg / Sony Music


フアン・ディエゴ・フローレス（T）
©Gregor Hohenberg/Sony Music Entertainment

ピョートル・ペチャワ（T）©Johannes Ifkovits

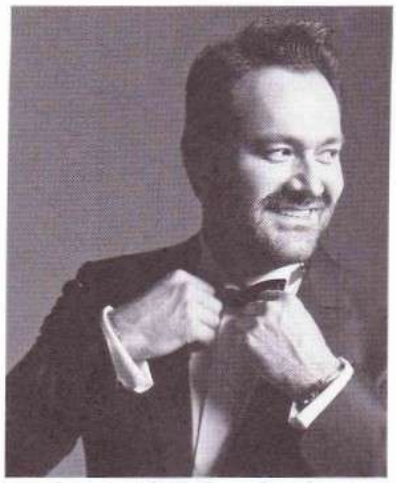
のフェントン役が当たり役だった。最近は重いレパートリーが多く、声帯に問題も抱えたが、ドイツ歌曲にも精通しているので声の健康を取り戻せているのだろう。イタリア的な発声からはどんどん離れていっているが、ジョルダーノ《アンドレア・シェニエ》は現在の当たり役だ。

ファン・ディエゴ・フローレス Juan Diego Flórez
貴公子は健在！

1973年ペルー生まれ。輝かしい高音と貴公子然とした容姿は、両方ともあまり歳を取らない。1996年ロッシーニ・フェスティヴァルでデビューしたこともあり、ロッシーニ歌いとして名を馳せた。軽めのテノールにとっての試金石、ドニゼッティ《連隊の娘》のトニオは当たり役。長い間ベルカント以上重いものを歌わなかったが、ようやくモーツァルトにレパートリーを広げ、最近はヴェルディ初期のアリアやプッチーニ《ボエーム》も歌い始めている。発声の基礎に厳格でありながら音楽的なフレージングと、ギターを片手に弾き語りもでき、笑いも取れる多面性がある。

ピョートル・ベチャワ Piotr Beczała
安心の歌唱が魅力

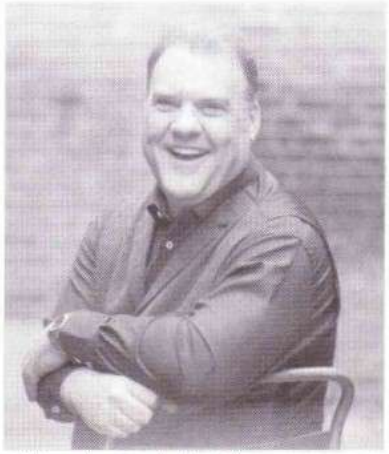
1966年ポーランド生まれ。1992年リンツ歌劇場専属歌手となるが、1997年に代役を務めたチューリヒ歌劇場に移動してからスターダムへ。スター的フェロモンはないが、熱心な研究により得られる安定した高音は、何を歌わせても安心して聴ける。とくにヴェルディ・テノールとして貴重な存在だ。ヴェルディ《リゴレット》のマントヴァ公爵やヴェルディ《仮面舞踏会》のリッカルド、ほかにもマスネ《ウェルテル》などが当り役と言える。「聴衆を不安にさせてはいけない」をモットーに、常に安定した発声で世界から引っ張り凧だ。


イルダール・アブドラザコフ（Bs-Br）

バリトン&バス Baritone & Bass

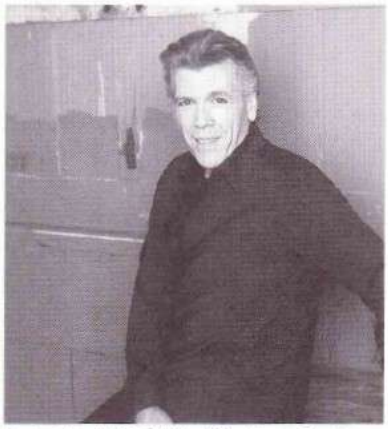
イルダール・アブドラザコフ Ildar Abdrazakov
シリアスからコミカルまでこなす

1976年ロシア生まれ。2001年ベッリーニ《夢遊病の娘》のロドルフォ役でスカラ座デビュー。今シーズンのオープニングを飾ったムソルグスキー《ボリス・ゴドゥノフ》などロシアもの以外にも、ヴェルディ・バスや各種のメフィストフェレスもこなす。いっぽう、美声と威厳のある立ち振る舞いに反し、コミカルな役が意外にもピッタリくる。ロッシーニ《アルジェのイタリア女》ムスタファ役など最高にハマり、観客を笑わせる才能もある。


ブリン・ターフェル（Bs-Br）©Mitch Jenkins/DG

ブリン・ターフェル Bryn Terfel
次なる当たり役に期待

1965年ウェールズ生まれ。1990年モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》のグリエルモ役でウェールズ・ナショナル・オペラにデビュー。その後《さまよえるオランダ人》や《ニーベルングの指環》のヴォータン役など、ワーグナーで威力を見せるバリトンに育ったが、このところイタリア語での声の扱いかたを開拓し、プッチーニ《トスカ》のスカルピアが当り役となっている。ヴェルディ《ファルスタッフ》の題名役でも、以前は深過ぎた発声が前面に当たるようになり、笑いのツボを心得たハイレヴェルな歌唱を聴かせるようになった。これからもどんどん当たり役が増えそうだ。4月に来日予定。


トーマス・ハンプソン（Br）©Jimmy Donelan

トーマス・ハンプソン Thomas Hampson
現代オペラにも注力

1955年アメリカ生まれ。デュッセルドルフのライン・ドイツ・オペラでデビュー後、1985年にチューリヒ歌劇場で歌い始めたころから国際的に注目を集め始める。美声だが、パワフルな声というよりも知性的な声の使いかたと演技力が魅力だ。上品な舞台姿はスターの貫禄があるが、実際はオープンな人柄だ。当たり役は《フィガロの結婚》のアルマヴィーヴァ伯爵、《ドン・ジョヴァンニ》の題名役、そして意外にも最近初役を果たした《コジ・ファン・トゥッテ》のドン・アルフォンゾなどモーツァルトや、ドニゼッティ《ドン・パスクワーレ》のマラテスタなど。現代オペラにも精力的に出演している。ドイツ歌曲の研究も熱心なため、ワーグナー楽劇でも声が届きやすい劇場では説得力を発揮する。